

旧日本窒素肥料グループの延岡地区における社宅街の建設

正会員○辻原万規彦*1 同 今村仁美*2

9. 建築歴史・意匠-2. 日本近代建築史 建築歴史・意匠

旭絹織, 旭ベンベルグ絹糸, 日本窒素火薬, 旭化成, 延岡新聞

1. はじめに

筆者らは、戦前期に日本最大かつ世界有数の化学工業企業群であった日本窒素肥料(株)グループの建設活動に関する研究を継続している。同グループが拠点とした水俣、延岡、朝鮮の興南のうち、興南の社宅街の建設過程については既に報告した^{1)・2)}。本稿では、興南に先行して着工された延岡を取り上げる。延岡では、現在も同グループを前身とする旭化成(株)グループの工場群が操業しており、『九州の企業都市』³⁾ではそれらの施設について概説されている。しかし、当時は社宅の多くが残っていたためか、詳細な配置図は示されていない。そこで、戦前期における延岡地区の社宅街の復元配置図を示し、その詳細を報告する。

なお、当時の用語や呼称はそのまま用い、引用文などは原則として現代仮名遣いに改めた。また、紙幅の関係から、年号は元号のみを記した。

2. 延岡における日本窒素肥料グループの概要⁴⁾

延岡地区で最初に建設された日本窒素肥料グループの工場は、大正11年8月に着工された日本窒素肥料延岡工場(愛宕地区(薬品工場, 薬品部とも))であった。五ヶ瀬川の水力発電による電力を用いたアンモニア合成工場である。その後、日本ベンベルグ絹糸が設立され、昭和5年2月に同社ベンベルグ工場(恒富地区)の建設が始まった。さらに翌年1月、日本窒素火薬延岡工場(東海地区(火薬工場とも))が着工された。昭和7年10月には旭絹織の2番目の工場として同社延岡工場(岡富地区(レーヨン工場, レーヨン部とも))が着工された。翌年、延岡アンモニア絹糸(昭和6年に日本窒素肥料延岡工場を引き継ぐ)、日本ベンベルグ絹糸、旭絹織が合併して旭ベンベルグ絹糸として一体的に経営されることになった。一方、日本窒素火薬は、昭和13年12月に雷管工場(長浜地区)を建設したが、昭和18年には旭ベンベルグ絹糸と合併して

日窒化学工業となった。戦後は、日本窒素肥料グループから離れた独立企業として、昭和21年に旭化成工業に社名変更し、現在の旭化成グループに至っている。

3. 用いた資料の概要

チッソ(株)には、大正15年12月から昭和8年末までの日本窒素肥料延岡工場(延岡アンモニア絹糸を含む)に関する社内稟議書のほか関連する書類や図面が所蔵されている⁵⁾。このうち建築関係の書類を主に閲覧してデジカメで撮影し、大判の図面はスキャンした。

延岡市立図書館には、昭和4年8月～昭和7年5月、昭和8年1月～6月、昭和9年1月～昭和12年6月までの延岡新聞⁶⁾が所蔵されており、全てを閲覧した。また、宮崎県立図書館も含め、関連する文献や資料も閲覧した。

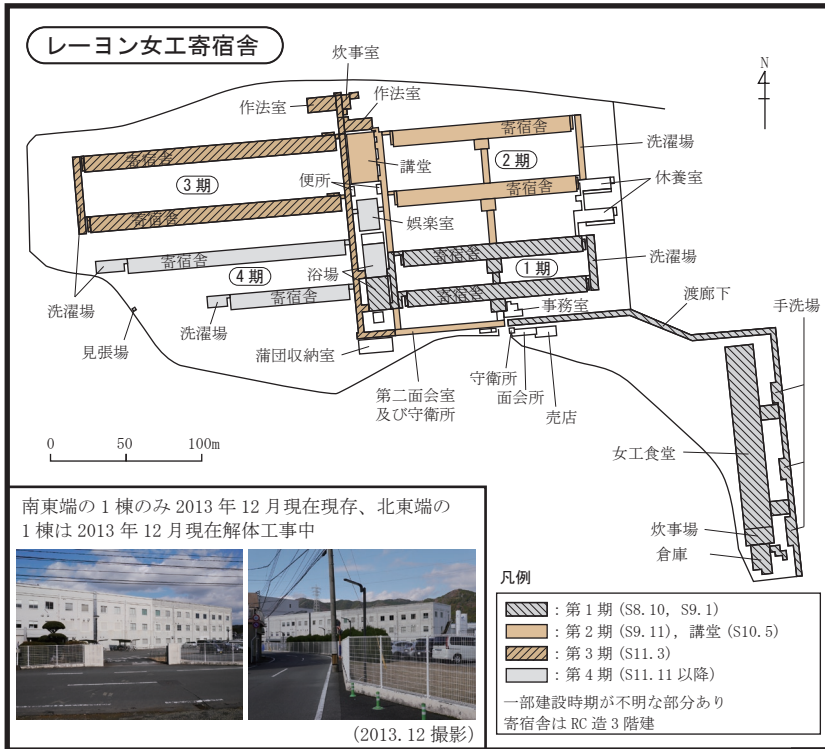
これらの他に、日本窒素肥料グループの社員らの証言集である『日本窒素史への証言』、公益財団法人野口研究所が所蔵する日本窒素肥料の社報、関係各社の社史や延岡地区の「工場史」、東京大学経済学図書館が所蔵する各社の営業報告書なども用いた。

また、2010年6月、2013年5月、7月、12月には現地調査を行った。なお、旭化成延岡支社では、社史や工場史などの二次史料は確認できたが、2015年12月現在、一次史料の存在は確認できておらず、二次史料の閲覧も許可を得ることができていない。

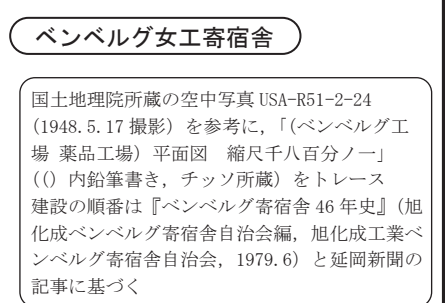
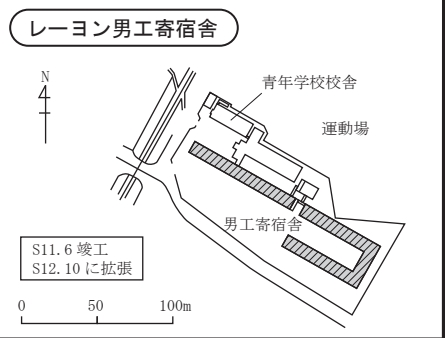
4. 延岡における5地区の社宅街

(1) 社宅街の配置図の復元

図1に、延岡地区全体の工場と社宅街の位置と、各地区の寄宿舍群の配置図を示す。図2に、各地区の社宅街の昭和10年代の復元配置図を同一縮尺で示す。チッソ所蔵の「旭ベンベルグ絹糸株式会社レーヨン工場配置図」と「(ベンベルグ工場 薬品工場)平面図」(() 内鉛筆書き)には調製時期が記入されていないが、書き込まれた建物から判断して、前者は昭和12年前半、後者は昭和10年代後半のものと考えられる⁷⁾。



国土地理院所蔵の空中写真 USA-R51-2-20 (1948. 5.17撮影)を参考に、「旭ペンベルグ絹糸株式会社レーヨン工場配置図 縮尺千二百分之一」(チッソ所蔵)をトレース
建設の順番は『レーヨン部史』(レーヨン部調査室編, 旭化成工業延岡工場レーヨン部, 1951.12)と延岡新聞の記事に基づく



国土地理院所蔵の空中写真 USA-R51-2-24 (1948. 5.17撮影)を参考に、「(ペンベルグ工場 薬品工場) 平面図 縮尺千八百分ノ一」(内鉛筆書き, チッソ所蔵)をトレース
建設の順番は『ペンベルグ寄宿舎46年史』(旭化成ペンベルグ寄宿舎自治会編, 旭化成工業ペンベルグ寄宿舎自治会, 1979.6)と延岡新聞の記事に基づく

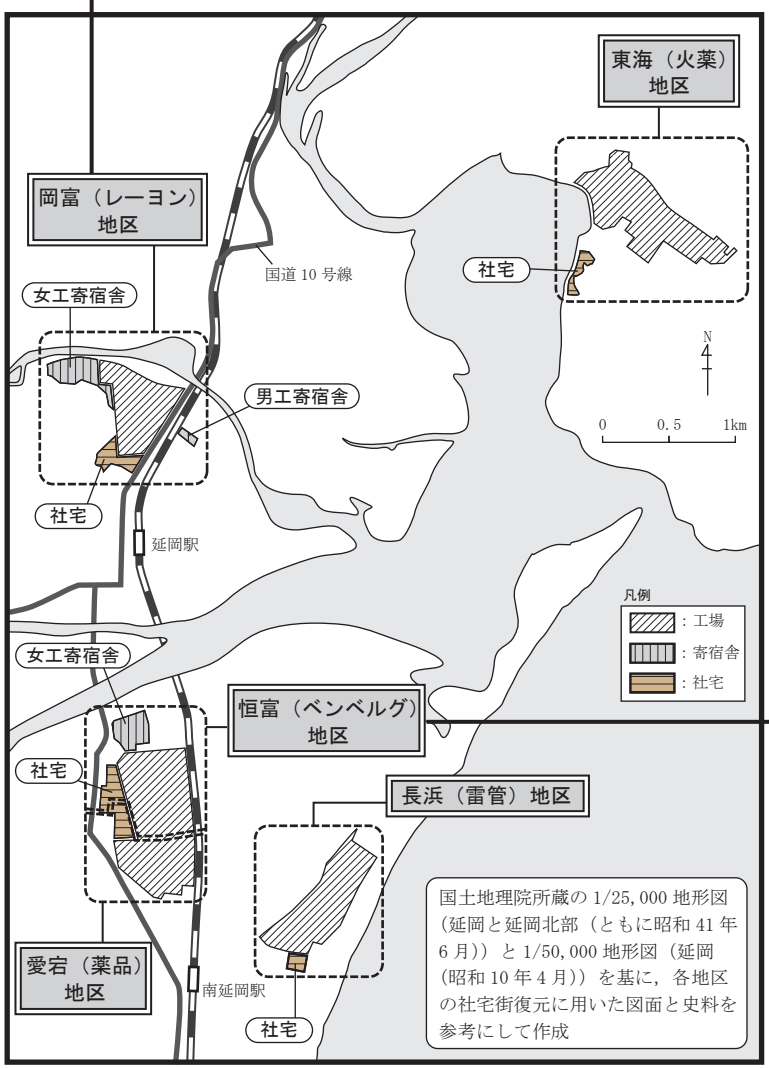


図1 延岡地区全体の工場と社宅街の位置ならびに各地区の寄宿舎群の配置図(昭和10年代)

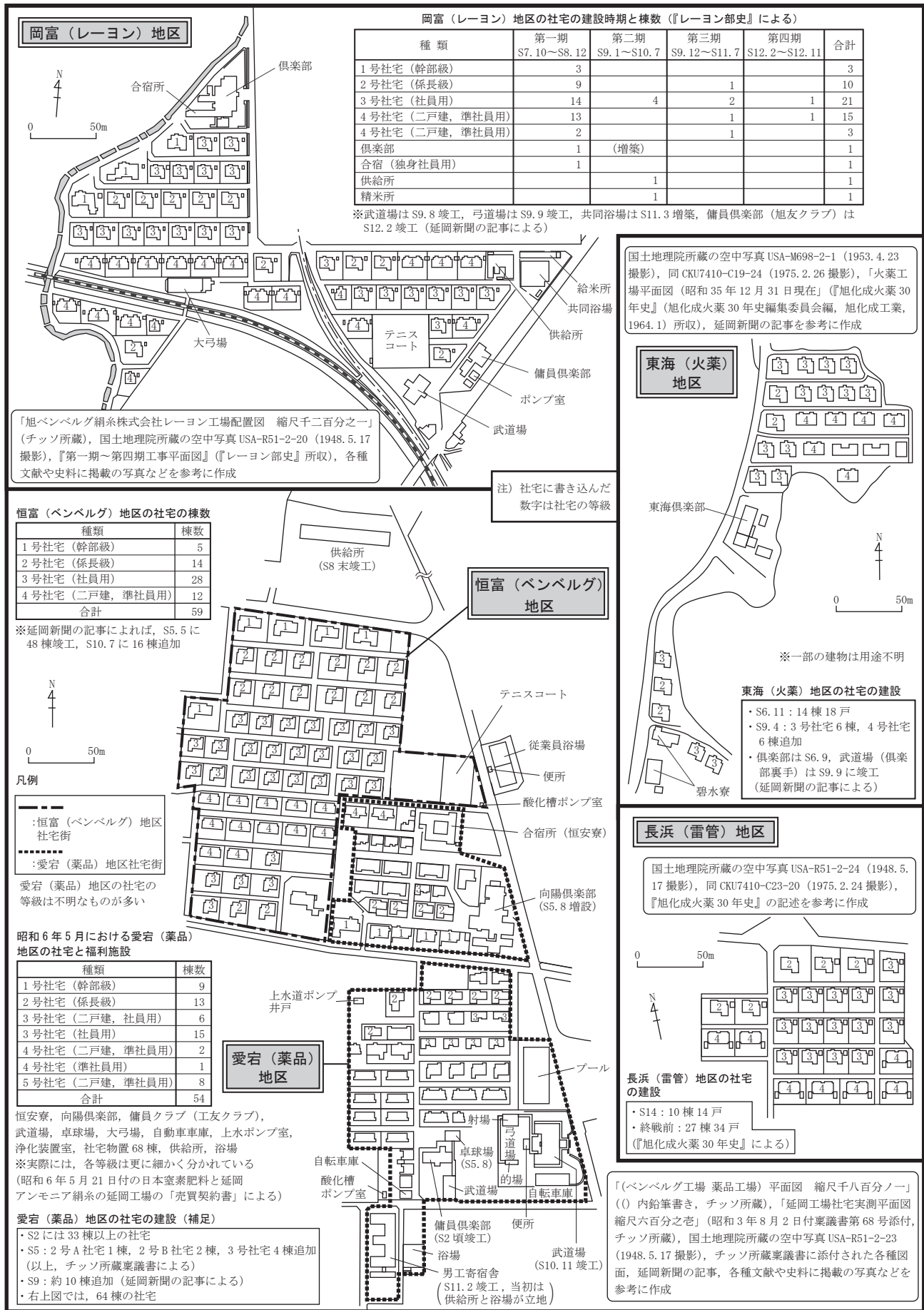


図2 愛宕・恒富・岡富・東海・長浜各地区の社宅の復元配置図（昭和10年代）

(2) 社宅街の建設過程

愛宕地区建設の主担当者は、着工当時に臨時建設部長であった島田鹿三⁸⁾と考えられるが、施工会社は不明である。寄宿舎を持たない愛宕地区の社宅は、工場正門前ではなく延岡の市街地との間に建設された。また、後の4地区に比べて様々なタイプの社宅が建設された。先行する水俣では多くの社宅を建設しておらず、延岡の建設で試行錯誤した結果である可能性もある。

恒富地区建設の主担当者は、旭絹織で大津工場の建設も担当した杉本敏夫⁹⁾、施工は西松組で、延岡出張所主任の小橋朝雄が担当した。延岡新聞によれば、この後、少なくとも昭和12年までは、工場や社宅のほぼ全ては、他の地区も含めて西松組の施工であった。

当時、日本窒素肥料グループの土木営繕組織の主力は興南に駐在していた。杉本は約1ヶ月出張して、大正11年に入社して延岡工場の建設を担当した伊東文吉建物係長¹¹⁾らの援助を受けて設計を行った。「京城の博覧会に展示されて一等賞をとった住宅の配置を取り入れ」⁹⁾た社宅では規格化が進み、以降の各地区の社宅でも同じ設計を用いたと考えられる。幹部用の1号社宅は「応接間が洋式となつてバルコニーが設備され、湯殿にいたるまで広く整い、極めて文化式に、衛生的に造られてい」(延岡新聞S6. 1. 28付)た。

東海地区の建設は、工場長の宮本正治が直接、または後の営繕課長の石塚種則が担当したと考えられ、日本窒素肥料延岡工場の関係者も貢献した¹⁰⁾。

岡富地区建設の主担当者は、長く日本窒素肥料の土木部長を務めた平野浅吉であった¹¹⁾。社宅は、「他の三社宅の長所のみを採つたもの」(延岡新聞S8. 3. 2付)とされ、不整形な敷地の制約の中でも、延岡地区での社宅街建設の完成形として捉えてもよいであろう。

長浜地区の建設は、当初は隈山嵩雄、後に広瀬定治が担当した¹⁰⁾が、最後に建設されたため、現在のところ最も情報が少なく、今後の検討課題である。

愛宕地区以外の4地区の社宅街は、工場正門または事務所の近くに建設され、恒富と岡富では寄宿舎は工場を隔てた反対側に建設された。また、工場着工と同時に大半の社宅が建設されるが、寄宿舎はその後に着工され、工場の拡充と共に寄宿舎も拡充が図られた。

これは居住者が、工場を管理運営する社員や準社員と労働者である職工のように異なるためであろう。なお、化学工業である愛宕、東海、長浜に比べて、繊維業である恒富と岡富の従業員数は格段に多かった。

(3) 延岡土地建物株式会社の設立

延岡新聞では、工場の建設の影響で、少なくとも昭和7年頃から住宅難が報じられた。昭和9年には一日平均2件、昭和11年には一日平均5、6件の新築があるにもかかわらず、常に「住宅は払底」していた。この問題を解決するために、西松組が主体となって、旭ベンベルグ絹糸と共に、従業員(職工)用住宅の建設を目的として昭和12年6月に「延岡土地建物株式会社」の登記が申請された。後の「延岡土地株式会社」で、「延岡駅以東」の敷地は後の桜園地区と考えられるが、現在のところ詳細な史料は未見で、今後の課題としたい。

5. 今後の課題

紙幅の関係から、今後の課題を指摘することと定める。
①旭化成所蔵の史料を閲覧したい。②チッソ所蔵の史料についても補足調査が必要である。③延岡新聞の所蔵がない昭和12年7月以降は宮崎新聞や日向日日新聞の閲覧が必要である。④都市計画との関係、工場内の施設配置、発電所との関係などの検討が必要である。

謝辞 調査の際には、次の方々にお世話になった(肩書きはいずれも当時)。チッソ株式会社 総務人事部社史編纂室 松永一敏氏、同大阪事務所 所長 齊藤継男氏、公益財団法人野口研究所 総務部 川又忠氏、旭化成株式会社 延岡支社延岡総務部 CSR・広報グループ長 小野雅史氏、延岡市立図書館、「野口 遵」顕彰会 幹事長 生田邦昭氏。記して謝意を表す。また、本稿は、公益財団法人大林財団の平成24年度研究助成による成果の一部である。

注・参考文献・引用文献

- 1) 辻原万規彦：朝鮮窒素肥料の興南地区社宅街について-野口研究所所蔵史料を用いて-、日本建築学会計画系論文集、第671号、pp.135~142、2012.1
- 2) 辻原万規彦：チッソ所蔵史料からみた朝鮮窒素肥料の興南地区社宅街、日本建築学会大会(近畿)学術講演梗概集、F-2、pp.475~476、2014.9
- 3) 日本建築学会：九州の企業都市-昭和56年度建築学会大会(九州)都市計画部門研究協議会資料-、日本建築学会、1981.9
- 4) 日本経営史研究所編：旭化成八十年史、旭化成、2002.12
- 5) これらの書類は、川村和男によって整理され、抄録集である『日本窒素の重要書類抄録』が作成されている(公益財団法人野口研究所などで所蔵)。
- 6) 延岡新聞は、大正11年に大分新聞の刷替版として発行を開始し、昭和4年8月1日に独立したが、昭和15年11月に日向日日新聞に統合された。
- 7) 旭ベンベルグ絹糸設立後の書類は基本的に全て旭化成に移管されたようであるが、これらの図面がチッソに残っていた理由は不明である。
- 8) 日本窒素肥料社報、第8号、1926.6.1
- 9) 杉本敏夫：大津、延岡工場の回顧-野口さんの人絹工業開発への貢献-、日本窒素史への証言、第5集、pp.5~98、「日本窒素史への証言」編集委員会、1978.11
- 10) 旭化成火薬30年史編集委員会編：旭化成火薬30年史、旭化成工業、1964.1
- 11) レーヨン部調査室編：レーヨン部史、旭化成工業延岡工場レーヨン部、1951.12

*1：熊本県立大学環境共生学部 教授・博士(工学)

*2：アトリエ イマージュ

Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.

Atelier Image